「最後の飛躍」

2014 年 07 月 01 日

「東京新聞」の 29 日の朝刊に、精神科医で、金城学院大学学院長の柏木哲夫先生が「思い出す人たち　感謝という飛躍　死は成長の最後の段階」と題して寄稿していた。柏木先生には個人的な思い出がある。二十数年前、先生の著書を読み、感銘を受けた。その時、家族の病気に悩んでいる方がおられ、私は手紙で、柏木先生に病状を詳しく書いて、治療についてのご意見を伺った。見も知らない私の手紙に、丁寧なご返事をくださった。優しく、誠実な先生であると感激した。以来、先生の著作を愛読してきた。

先生はホスピスの現場で約 2,500 人を看取り、貴重な学びの体験をし、多くのことを教えられてきたと言われる。先生にはとても及ばないが、私は牧師として 80 名以上の葬儀の司式をし、死にゆく方々とお別れしたのは 100 名を超えよう。死は、今まで顔を見て、話していた人が不在になるのだから、こんな悲しいことはない。最高の医療で、手厚い看病をしても、死の悲しみは癒され難い。理不尽な戦争での死や、不慮の事故で亡くなった場合の、痛手の深さを思う。そして、死を迎える姿は、実に多様である。

先生は、良く生きた者が良き死を迎える、逆に言えば、良き死を死ぬためには、良き生を生きる必要があると言われる。そのように思う。ところが、死に方を自分で選び取れない。医療が発達した現在は「いかに死ぬか」が大きな課題になっている。

先生は神経症治療の一つの「内観療法」を紹介し、過去を振り返り、多くの方の支えで生きてきたことを知り、感謝の大切さを学ぶと言われる。仏教で「自立と他力」という言葉がある。自力で生き、自力で救いに到達することなどあり得ない。人は皆、他に依存して、生と死を全うしていくのである。死に直面した時、この事実を知らされ、感謝する「最後の飛躍」、死という最後の段階でも成長があると書いておられる。

死を受容した素晴らしい言葉を聞き、その光景を見る機会を多く得てきた。私の親友は言葉を無くした病床で、サインペンで「天国のドアマン」と、私を天国で待っていると書いてくれた。戦前、戦中、戦後を働き詰めで苦労した父は処置のしようがない胃癌になり、家族が集まった時「自分ほど幸せな男はない」と輝くような笑顔で話してくれた。嫁をいびり続けた姑が、最後に嫁に「ありがとう」と言われ、彼女は、その一言で全ての過去が清算されたと喜んだ。

死を迎えた人は心が清められていくのではないか。それが、先生の言われる感謝と自分を委ねる謙虚な「最後の飛躍」ではないかと思う。私は牧師として、死にゆく方々と向き合ってきた。率直に言えば、死は豊かさ、強さ、美しさの対極にあり、また差こそあれ、体と心の痛みは避けられない。その方々の前で、全身をそばだてて聞き入る。彼らは嘘のない真実を語る。その真実な言葉に生と死のメッセージが込められている。私が牧師職を続けてこられたのは死にゆく方々との出会いとお別れであったと実感している。

死に直面する時、死を超えた永遠の神を憧れ、その方の実在を認識でき、生かされている恵みを悟らされる。私は今、どんな死に方でもよいと思っている。死を超えた神が責任を取って、神の命に包んでくださると信じるからである。そして「メメント・モリ」、死を覚える者が生を充実して生きられることは確かである。